

1 青年期の課題と自己形成

1.0.1 人間とは何か？ 文化とは何か？

人間観 人間の定義 人間 homo sapiens sapiens (人, 賢明な←ラテン語)

人間観: 「人間とは何か」という問いに対する答え

	英知人・知性人	知恵のある人,18 世紀生物学者リンネによる名称 古代ギリシヤ的理性人
	zoon politikon	アリストテレス『政治学』による人間の定義
	宗教人 homo religiosus	imago Dei（ ）としての人間、再び神と結びつくという聖書の人間観
	工作人	人間のみが世界を自身にとって望ましいものに改造することができるとするフランスの哲学者（ ）の定義
	animal symboricum	ドイツの哲学者カッシーラによるシンボルをあやつる動物という定義
	遊戯人	オランダの歴史家ホイジンガによる人間の定義
・	homo universalis	ルネサンス理想の人間像(ブルクハルトによる)
職業人	職業人	神の栄光を地上にあらわすため神に与えられた仕事にいそしむ。資本主義の精神につながる宗教改革の人間観（M・ウェーバーによる）
	経済人	物欲の充足を利己的に追求し、自己の利益の最大化を図ることが人間の行動基準 アダム・スミス（経済学の父）の人間観
	錯乱する人	本能が壊れてしまった人間に対する文化の必要性
教育されなければならない人間		ランゲフェルト（オランダ教育学者）

(): 20 世紀フランスの実存主義哲学者

= 「人間は定義できない…人間はみずからつくったところのものになる」 ⇒ 資 p.230

パスカル (17 世紀フランスの科学者, 宗教思想家) の人間観 → 資 p. 173 教 p. 139

「人間は… () である」 (『パンセ』 347)

人間の 悲慘な側面: 自然・宇宙に比べての小ささ, 弱さ, 有限性 } () としての人間
偉大な側面: 思考, 精神, 人間の尊厳の根拠

幾何学の精神: 厳密で論理的な科学の精神

() の精神: 柔軟で直感的な精神

⇒ 矛盾を抱えて不安な人間に救いを与えるのが神の愛

文化 (culture ← 羅 cultura (耕作された土地)) cf. () = 農業 (agri=畑)

: 自然に対して, 学問・芸術・道徳・宗教など, 人間の精神の働きによってつくり出され, 人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの。(『国語大辞典(新装版)』小学館)

文化と文明の違いの考え方

1. 農耕文化と都市文明
2. 精神文化と物質文明

() = 対抗文化: 支配的文化 (メインカルチャー) に敵対し反逆する下位文化 (サブカルチャー)
 ex) 大人社会への反抗としてのロック, ヒッピー⇒若者文化ユースカルチャー
 →文化相対主義 vs. 自民族中心主義 (エスノセントリズム)

野生児: 人生の早期から人間的な環境を奪われ, 野生生活を送った子供

ex.) アマラとカマラ (狼少女), アヴェロン (南フランス) の野生児

⇒ 言語をもたない, 直立歩行が不可能, 羞恥・性的関心を欠く, 動物的食事習慣

カマラ: スキンシップなどの養育によって, 1年半後直立, 4年目に6語を話すようになり, 5年目に手を使ってコップから水を飲む。17 歳までに 45 語の言葉を話し, 衣服も自分で着られるようになった。このように普通児並の発達ではできなかった。(自閉症児説もある!)

資料 野生児アマラとカマラ

: 16~17 歳になっても普通の子供の 3~4 歳程度の能力にしか回復しなかったといわれる。

インドのカルカッタに近いある村で, オオカミのすむ洞窟の中から 2 人の少女が発見された。1920 年のことである。大きい方は 8 歳くらい, 小さい方は 1 歳半くらいと推定され 2 人とも生まれてまもなく, オオカミにさらわれたのであろうと思われた。孤児院に収容されたが, アマラと名づけられた小さい方は 1 年足らずで死に, カマラと命名された大きい方は, それから 9 年間くらいの間, 他の孤児たちと一緒に生活した。……人間の発声法を知らないカマラは, オオカミのようなほえ声を出すだけで, 夜中にはさかんに遠吠えをした。食べるものはペチャペチャとなめて食べ, 腐った肉をあさったり, ニワトリを食べたりもした。着物を着せられたり, 風呂に入れられることを極端に嫌い, 人間の言葉はしゃべらず, 聞いても理解できていなかった。カマラはオオカミとして行動できて人間行動の仕方は知らず, 人間としての性格はできていなかったのである。その後の 9 年間に示したカマラの進歩は確実であったが, まことに遅々としたものであった。(A・ケーゼル『狼にそだてられた子』)



資料 ホイジンガ『ホモ・()』

ホイジンガは理性人という規定が 18 世紀に頂点に達した後, むしろ人間活動の本質的機能を遊ぶことに見て『ホモ・ルーデンス』を著した。ホイジンガは遊びを, 日常生活からの離脱と虚構性の意識, 楽しさを本質とする自由で自己目的的な活動, 没利害性, 限定された時間空間と独自の規則性といった点から規定し, 人間文化が遊びの中において, 遊びとして発生し, 展開してきたとする主張を, 法律, 戦争, 学術, 文芸, 芸術, 哲学といったものの生成と展開を追跡することによって具体的に提示した。また, ファシズムの嵐の状況下, ホイジンガは現代文明を遊びの精神の喪失形態ないし墮落形態として批判した。(『岩波哲学思想辞典』より)

ホイジンガ (1872 - 1945): オランダの歴史家, 文明批評家。西ヨーロッパ中世史を研究。〈文化史〉を主張し, 14~15 世紀のブルゴーニュ公国を舞台に繁栄した文化の諸相と人々の生活を豊かなイメージと鋭い感受性で描いた『中世の秋』(1919)を発表して大きな反響を呼んだ。1938 年〈遊び〉論『ホモ・ルーデンス』を発表した。

1.0.2 欲求と適応

欲求 (need) : 生物が生きるために必要なものが欠乏したときに、それを求めようとする行動の心理的な原動力

() 的欲求 (一次的欲求) : 生物としての人間の生命機能を維持し、種族を保存しようとする欲求。ex) 呼吸, 飲食, 排泄, 睡眠, 性欲など

() 的欲求 (二次的欲求) : 社会生活を営む上での文化的, 精神的欲求

cf. () : 米心理学者) の欲求階層説

欲求は, ①生理的欲求, ②安全への欲求, ③所属と愛情の欲求, ④尊重 (承認) の欲求, ⑤自己実現欲求といった形で階層をなしており, それぞれが飽和水準に達すると, 次の高い階層レベルの欲求充足が刺激されて行動のイニシエーター (起爆剤) になる。() の欲求が人間の最高の欲求。

※欠乏欲求 と成長欲求

() (adjustment) : 個人が環境と調和した関係を保つこと。家庭, 学校, 職場などの環境の要請に応じながら個人の欲求を満足させている状態。

不適応 (maladjustment) : 適応がうまくいかない状態。

欲求不満 (フラストレーション : frustration) : 欲求が充足されず緊張や不安が高まった状態。

不適応行動を起こしやすい。⇒欲求不満への耐性 ()

() (コンフリクト : conflict) : 個人内に対立する二つ以上の動機 (欲求, 衝動, 意見など) が同時に同じ強さで存在し, 相争っている状態

※フロイトは本能的衝動 (イド) と道徳 (超自我) の間の葛藤を神経症 (ノイローゼ) の原因と考えた。

欲求不満 (適応をうながすサイン) に対する反応 資料集 p.10 教科書 p.12

1. 合理的解決
2. 攻撃的行動, 近道反応 (衝動的欲求不満排除)
3. 防衛反応 (次頁)
4. 失敗反応

フロイトの思想あるいは人間観

フロイト (1856-1939) : オーストリアの精神病理学者, () の創始者。主著『精神分析入門』『夢判断』

精神分析 (psychoanalysis) : 19 世紀末フロイトによって体系づけられた深層心理学, 精神病理学における学説。精神の深層, つまり潜在意識内のコンプレックスを対話, 連想, 夢判断などの方法により表面の意識を分析することによって発見しようとするもの。病氣治療だけでなく, 芸術, 宗教その他ひろく精神現象の理解に応用されている。

⇒ヒステリー (神経症の一種) の原因を () = 心的外傷 (psychic trauma) であると考えた

() = post-traumatic stress disorders = 心的外傷後ストレス障害

※ヒステリーの運動系の症状としては, 立てない, 歩けない, 四肢の麻痺, 痙攣 (けいれん), ふるえ, 声が出ない, 飲みこめない, 嘔吐など, 知覚系の症状としては, 皮膚知覚の鈍麻, 皮膚知覚の麻痺, 痛覚過敏, 聞こえない, 見えないといった機能障害をあらわす。

() : 意識されず自覚のない精神活動。意識や行動に影響するが, 夢や精神分析によらなくては意識されない。

() : 心の中のしこり・かたまり (欲望が抑圧によって無意識中に押し込められ形成)

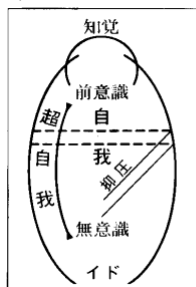
() ・コンプレックス : 人が両親に対して抱く無意識的な愛および憎悪の欲望のすべて。父親を殺して母を妻としたギリシア伝説のオイディプス王から名付ける。→資 p.238

錯誤行為 : 「言い違い」「もの忘れ」「置き忘れ」などにあらわれる無意識の欲望

夢判断 : 「夢の心的機能は () 充足にある」

フロイトの思想あるいは人間観（つづき）

- ・ 心的装置論：人間の心、人格（パーソナリティ）を自我・イド（エス）・超自我の3要素から説明



フロイトの「心の構造」の図

自我は、その大部分を占める前意識的なものと、無意識的なものに分かれ、無意識的なイドにつながっている。超自我は自我ともイドとも連絡はありながら、一応の独立性をもったものとされている。図の下方のイドが開いたままなのは、図示できないほどの巨大さを意味している。（フロイトの『続精神分析入門』による）

自我（エゴ ego）：人格の主に意識的な部分。（ ）原則に従い、現実への適応を図る。

イド id（エス Es）：性衝動（リビドーlibido）と攻撃衝動の貯水池。（ ）原則に支配される。

超自我（スーパーエゴ super-ego）：養育や教育によって形成された無意識的な良心。禁止と抑圧。自我の検閲者

生の本能（エロス）：自我本能（自己保存の本能）と性本能（種族保存の本能）

死の本能（ ）：自分自身を攻撃し破壊することにより無機物の不変性(死)に回帰しようとする欲求

- ・（ ）・防衛反応（defense mechanism）：合理的な適応に失敗したときに自我が無意識のうちに用いる不合理な適応手段、一種の自己欺瞞。頻繁な反応は神経症的症状の形成をもたらす。

- ・（ ）：欲求を押さえつけ無意識の中に押し込める ex)忘却
- ・（ ）：もっともらしい理屈を付けて自分を正当化する ex)すっぱいぶどう
- ・ 同一視（同一化）
 - ①取り入れ：他者の好ましい特性を自分と同一に見なす ex)ドラマの主人公のつもり
 - ②（ ）：認めたくない自分の特性を他者に転嫁する
ex)嫌いな人に嫌われていると思ひこむ
- ・（ ）：抑圧された衝動を意識しないために反対の傾向を強調する
- ・ 逃避・退行：現実の困難から空想、病気に逃れる。発達段階の逆戻り、幼児化。
- ・ 置きかえ（転位）
 - ①代償・補償：願望が接近したものや類似したものに置き換えられる ex)子供がわりのペット
→A・アドラーが重視：劣等感コンプレックスを解消するために他の方面で優越感を持つとする。
 - ②（ ）：リビドーを芸術活動や知的活動など社会的に価値のあるものに向ける

ユングの思想あるいは人間観

ユング（1875-1961）：スイスの精神医学者、フロイトの『夢判断』を読み、彼の協力者となるが後に考えの違いから訣別。主著『心理学的類型』『心理学と錬金術』『変容の象徴』『アイオーン』

- ・ 無意識の構造

個人的無意識：個人の意識内容が忘却されたもの、意識によって抑圧されたものなど

（ ）的（普遍的）無意識：遺伝的に獲得された、人類に共通の普遍的な無意識。元型によって構成される……芸術家や宗教家のインスピレーションの源

（ ）：archetype）：神話、伝説、妄想、幻覚などに共通してあらわれる普遍的なイメージ

元型の例：

グレートマザー（太母）：すべてを包む母なるもの

シャドウ（影）：自分につきまとうもう一人の自分

アニマ：男性の中の女性的な面、 アニムス：女性の中の男性的な面

1.0.3 パーソナリティの形成

パーソナリティ (personality :) ← 羅 persona=仮面 → 英 person=人

: 各人を特徴づけ、その人独自の行動様式をもたらす精神と身体の**全体的人間像**

パーソナリティの三要素: **能力** (知): 知能・技術

気質 (情): 感情の傾向

性格 (意): 意志・行為の傾向

※ () 的要因と () 的要因の複雑な相互作用の中で形成される。

(character :) : 人間の行動の仕方や考え方の特徴。広い意味ではパーソナリティと同じ意味で使われるが、**後天的に形成された情緒的・意志的な面での個人差**を指すことが多い。

(temperament :) : **先天的な感情や情緒**の特徴

(individuality :) : 他と区別されるその人固有の性質

() 化: 社会の規則や規範、考え方などを内面化して社会に適応するプロセス

↓

() 化: 自分の能力や個性に即して、周囲の環境に能動的に働きかけるプロセス

パーソナリティの類型

・ () の**気質**類型論: 体型と気質の関連性 『性格と体格』

肥満型	循環 (そううつ) 気質	社交的, 親切, 気分の上下がある
筋骨型	粘着 (てんかん) 気質	几帳面, ねばり強い, 融通効かない
やせ型	分裂気質	非社交的, 静かで内気, きまじめ,

・ **ユング**の類型: 心的エネルギーの方向性による類型

() 型	心的エネルギーが外界へと向かい、外的な事物や人物に関心を示し、外界からの影響を受けやすい傾向。新しい場面でも気おくれせず積極的に行動する。
() 型	心的エネルギーが内界へと向かい、内的な事象に関心が向かうこと。控え目で新しい場面ではしりごみする。

・ () の類型: その人が追求する価値による類型

理論型	真理, 理論に関心をもち知的興味が高い。
経済型	財産の獲得に関心をもち経済力によって人を評価する。
審美型	芸術を愛し, 美の創造に関心をもち。
社会型	社会の福祉, 奉仕に関心をもち。他者への愛に価値を認める。
権力型	政治や他人を支配し命令することを好む。
宗教型	信仰によって生きることの価値を認める。

・ **リースマン**の類型: 現代社会に生きる人間像 著作『 () 』

伝統志向型 (前近代)	() 志向型 (近代)	() 志向型 (現代)
封建時代の特色。伝統, 習慣などの既存の価値観に従い権威に従順。	近代市民の特色。行為の指針を個人の良心・理性に認め, 自発的選択によって行動。	現代の特色。マスコミや仲間など他人の意見, 周囲の反応を自分の行動の原理とする。

フランクフルト学派の思想家たち

- ・アドルノ 1903-69 (フランクフルト学派*) 『() 主義的パーソナリティ』
() 主義的パーソナリティ：ナチスのファシズムを支持した大衆の心理
 - ・強いものに従順，弱いものに強圧的
 - ・偏見や差別意識にとられやすい
 - ・自分の所属する集団への所属意識が極端に強い
 - ・思考が紋切り型のステレオタイプである など

- ・フロム 1900-80 (フランクフルト学派・新フロイト派)

『() からの逃走』『正気の社会』

：社会が人格形成に大きな影響を与えていることを強調

社会的性格＝あるひとつの社会集団の成員のほとんどがもつ性格構造の本質的中核

⇒制度としては民主制機構を採っていても，被支配者の大部分が権威主義的思考様式をとる限り，権威主義的支配はその威力をふるう。

「自由からの逃走」

近代社会の自由は束縛からの解放をめざす消極的な「…からの自由」であり，生産的な仕事を通して，人間や自然と愛をもって連帯しようとする積極的な「…への自由」ではない。束縛からの解放は孤独と無力感を生み，それを解消するため外部の権威に服従する社会的性格が生まれ，ファシズムの温床となった。

*フランクフルト学派：正統派マルクス主義の教条主義に反対しつつも，なんらかの意味でマルクスの批判的動機を受け継ぎ、それをフロイトの精神分析学やアメリカ社会学の経験的方法と結び付けて、現代の経験を踏まえた「社会の批判的理論」を展開した。

成熟したパーソナリティの6要件

アメリカの心理学者()によれば，成熟したパーソナリティの要件は次の6つ。

- (1)社会的領域へ拡大された自己意識
- (2)他者との暖かい関係性の構築
- (3)情緒的安定性と自己受容
- (4)現実世界と接触する知覚と技能
- (5)自己客観化，自己洞察とユーモア
- (6)統一的な人生観と調和した生活

ニート (NEET) : Not in (), Employment or Training

：教育機関に所属せず，雇用されておらず，職業訓練に参加していない者のこと。

1.0.4 青年期の心理と課題

青年期 adolescence：児童期と成人期の間期の時期，あるいは**過渡期**。一般的には中学・高校・大学生（12,3～22,3 歳）位の年齢

⇒**青年期の延長**：就学期間の延長などにより，現代の青年期は一昔前よりも延長したといわれる。第二次性徴の現れる女子 10 歳，男子 12 歳～14，15 歳ころまでをプレ（前）青年期（思春期前期），そして 22,3～30 歳までの期間をプレ（前）成人期として青年期に含めるようになってきた。

（ puberty）←羅,英 pubes（陰毛）
：主として青年の身体的・性的成熟に焦点をあてた児童から成人への移行期

第二次性徴：思春期に，性ホルモンの作用によって起こる身体上の男らしさ，女らしさ。

（ ）：青年期の精神的自立。18 世紀フランスの思想家（ ）による。⇒ 『エミール』

マージナルマン marginal man（ ， ）：一つの集団から他の集団へ成員性が変化した場合，集団への所属性が不安定となり，個人は強い緊張を示す場合がある。たとえば，落ち着きのない態度・行動，過度の自己意識など。児童期と成人期のどちらの集団にも属さない青年をドイツの心理学者**レヴィン**はマージナルマンの典型であるとした。

疾風怒濤（ Sturm und Drang）の時代

：心身の変化が著しく，不安と悩みの多い激動の青年期をあらわす言葉。もともとは 18 世紀後半，ヘルダー，ゲーテ，シラーらによるドイツの文学運動。理性や秩序ではなく人間の情熱，力強い感情移入，創造的天才性などを重視した。

発達課題（ハヴィガースト，エリクソンらの概念）

青年前期の発達課題：心理的離乳，仲間づくり，性的な身体の変化への対応など

青年後期の発達課題：同年輩の異性との交際という新しい仲間づくり，アイデンティティの模索 identity - seeking，職業選択とその準備

※エリクソンは**8 段階のライフサイクル**，発達課題を想定

アイデンティティ identity（ ，自我同一性）

：自分であること，自己の存在証明，真の自分，主体性

→**アイデンティティの危機（拡散）**：青年が親密な人間関係をつくれず，集団の中での自己の役割が見えなくなり，自己を見失って精神的危機に陥った状態。

（ moratorium）：大人への準備期間。大人に課す責務を一時期免除した猶予期間（←経済用語より：政府が法令に基づいて債務の支払を一定期間猶予させること）

資料 マーガレット・ミード（米、文化人類学者） 思春期は近代の所産である

ミードは学説史的には一般にベネディクトらと共に、「文化とパーソナリティ」論を発展させた中心的人物の一人として位置づけられている。…ミードは心理学的視点を取り入れて文化がどのように個人に影響を与えるのかを、とくに幼児期から思春期を経て成人に至る時期に焦点を当てて考察しようとした。

ミードが初めてサモアへフィールド調査に出かけるとき、ボアズはこれまでほとんど調査されたことのない思春期の少女について研究するよう示唆した。西欧社会で若者たちが遭遇する「思春期」と呼ばれる精神の不安定な危機的状況が、はたしてS・ホールの主張するように発達史的、生物学的な理由によるものでこの社会にも共通して存在するものなのか、それとも社会文化的要因による「近代」の所産なのか。また広くインディアン部族の少女に見られる「恥じらい」や、性の問題に関してはどうか。ミードはタウ島の三つの村で五〇人の少女について調査した結果、サモアでは思春期のストレスや危機は何ら認められないこと、子どもたちは自由に他の家にも出入りし親子間にはあまり緊張関係が見られないこと、幼いときから徐々に社会的責任を担わされていくので大人になる過程で断絶を経験しないこと、性愛に関しては実におおらかで自由で、結婚も離婚もたやすく嫉妬などの感情があまり見られないことなどを発見し、これらを『サモアの思春期』にまとめた。

『文化人類学群像1』（アカデミア出版、1985）

⇒ 青年期は伝統社会には見られないという主張！

資料 アイデンティティとは

アイデンティティという言葉はほとんど日常語となってしまった。しかしながら、これは日本語に訳しにくい言葉の代表的な一つでないか。にもかかわらず日常的に使われるようになったということは、いかにアイデンティティの問題が現代の日本人にとって切実かをものがたる事実だと思う。

アイデンティティの説明から入ろう。身分証明書や識別票のことをアイデンティフィケーション・カードという。同一人物なることをたしかめ、相違なしと認めることをアイデンティファイするという。それらのことからだいたいニュアンスを汲み取れるように、自分の証明に関わることがらである。アメリカの心理学者エリクソンが1950年にこの概念を提唱したとき、そこに次のような二つの「自分の証明」を含ませていた（『幼児期と社会』仁科訳、みすず書房）。

- ①生まれてこのかた自分は「一貫した存在」として今日まで生き続けており、さらに今後もその延長上を生きるであろうという自信。
- ②自分という存在もしくは自分の生き方が、自分の生きているこの「社会によって是認」されているはずだという自信。

こういう二つの輪があって初めて人間は安定感を持って生きていける。エリクソンは臨床心理学者として精神病とノイローゼの間くらい重さの病気に悩む青年たちを治療した経験から、このアイデンティティということをお願いしたのだ。これらの青年たちがしばしば口にするのは「自分とは何か」「どういふ自分であることがもっとも自分らしいのか」「世界は自分に何を期待しているのか」「世界には果たして自分の座る椅子はあるのか」などの自問自答であった。

笠原嘉『不安の病理』（岩波新書、1981）

「生きる意味」について

神谷美恵子（1914～1979）：ハンセン病患者療養所での勤務経験をもとに『生きがいについて』を著す。「使命感に生きている人」がもっとも生きがいを感じる人。

（ ）：オーストリアの精神医学者。アウシュヴィッツ収容所に入れられたときの体験を『夜と霧』にまとめた。性欲（フロイト）や権力欲（アドラー）からではなく、「生きる意味を求める存在」としての人間を分析する実存分析という手法を唱えた。